一筆致啓上候。時節も暖氣に趣候、彌御堅固可有御座珍重御事存候。如何御痛所、御快方に候や御左右承度存候。然者先頃御借し被下候御自撰の御書物、緩々留置拜讀之、御目に掛り御教諭の益を得候心地仕、誠以不淺忝致大慶候。則書寫仕候て致返進之候。此邊無替儀致勤役候。乍慮外可安貴意候。萬々重て可申述候。恐惶謹言。

四月廿三日　　土岐丹後守賴稔判

室新助樣人々御中

猶以日永の節如何御暮し被成候や、御痛所の御樣子承度存候。御書物緩々留置熟覽之、毎章感心仕候事に御座候。以上。

一、室鳩巢太公望畫讃

渭陽樂釣。材致霸王。隱去龍蟄。出來鷹揚。吾道素定。何論行藏。志濟天下。一擧殪商。維此尙父。上配阿衡。並馳古今。莫之與京。輔文弼武。其列光明。丹書垂戒。視我周行。

一、加藤清正に殉死の朝鮮人

加藤肥後守清正逝去の時、金官といふ朝鮮人あり。此金官は清正朝鮮在陣の內より、如形念頃に召使、後には二百石の祿米を下し給ふ。清正の死を聞て、一日片時もながらふべからずと云て自殺せんとす。時に慶長十六年六月廿四日の事也。子供兩人有之。是を見付大に驚き、脇指をとり種々に教訓してとゞめ、脇指も隱し丸腰にして置けるに、十四五日も過ける故、思とゞまりたると子供はじめ思ひ油斷したる時分、箍輪(タガワ)師の通りけるを呼入、古桶共の輪を懸させて見ゐたるが、人のなき時箍輪の鉋を取て腹切て死たりけり。此外に大木土佐といふも、六月廿五日の辰の刻に於私宅追腹す。是は元來佐々陸奧守に仕へしが、奧州死後淸正に奉公し、三千石迄給りし、數年別ての悃志なり。仍之殉死しぬ。此兩人清正葬禮、十月十三日に西光寺原といふ所にて執行の時、清正龕の次に續て土佐・金官か棺を舁せ、中尾山の墓所へも、左右の脇に並て建たり。

愚謂。清正遺愛人に在し事、此兩殉死にても景慕すべし。清正至て微賤より登庸せられ、譜代舊功の臣下は一人も無之筈なり。右兩人は亡國の舊臣、或は異域のとらはれにて、恩に感じ殉死するに至る。眞に難得君德と云べし。但金官が父母の國にて義死は不遂して、區々たる私恩に

て自殺する事、不都合千萬に聞え候。然共其人の始終を不詳ば、一概に難論。定て幼少なるものを召捕え不便を加へ、幸ひ其人品よろしきが故に、常々悃志にいたされたるものならん。我國にても脇田九兵衞、朝鮮にて宇喜多秀家の軍へ召捕候時、七歲にて金如鐵といひし。秀家敗亡の後、我瑞龍公へ仕申、微妙公の御時に至り千石の祿を給り重職に任じぬ。か樣の類なるべし。然れば節義を失ふとは云がたし。傑出の人といふべし。

一、江州池宮の記事

江州栗太郡志津莊靑地邑池宮神祠。享祀天兒根命也。祠官相傳。延喜帝延長四年丙戌。勅賜號小槻神社。不詳其創建於何年。祠本在志津莊菖蒲谷。天曆帝天德三年己酉八月。遷今志津池上。賜敕額榜正一位池宮大明神。後光嚴帝貞治二年癸卯三月十八日。邑主左衞門大夫靑地某。令其臣奧村參河監造神輿。(今所傳神輿記。是事也。)後花園帝寶德元年己巳十一月十五日。邑主靑地某奉祀田若干。(其名未聞。今所傳文書。署曰城東。祠官相傳。城東蓋其年老退去之地。在城之東郭。因遂以此自稱云。)又有修理亮靑地俊綱所奉文書一通。今其書並存。然歲久字蠧。復不可識矣。至於後柏原帝永正十六年己卯。神祠大壞。邑主駿河守靑地元眞脩飾焉。(今所存神祠棟牓之文詳載是事。又載右自淸和帝貞觀五年癸未至光明帝康永三年甲申。所賜綸旨院宣十一通。今其書並不存。棟牓紀年即永正十六年也。)正親町帝天正六年戊寅三月五日。邑主靑地千代壽丸。令其臣奧村但馬監修池宮末社等事。其文書亦見在。是靑地氏世々崇祀池宮也。原夫靑地氏者佐々木成賴八世孫基綱爲始祖。(成賴六世孫曰定綱。定綱第五子曰廣定。廣定之子曰信定。曰基綱。基綱實爲靑地氏祖。)自是以來。世々主於靑地邑矣。正親町帝永祿十一年戊辰八月廿六日。前駿河守長綱(老稱道徹)卒後。駿河守茂綱襲封嗣立。茂綱實蒲生氏。下野守定秀第二子。長綱無嗣。以女配之。以爲壻子。是歲宗國佐々木義賢其子義治(初名義鄕)爲織田主所滅。江州亡矣。茂綱與織田信治及森可政等。距淺井朝倉兵於志賀郡阪木兵敗。信治可政皆授首。茂綱傷甚。從兵扶之而去。二十日遂病創死。子元珍嗣立。元珍幼名千代壽丸。後稱內匠助。又改四郎左衞門。天正十年壬午。織田主被弑。元珍致志織田主子信孝。由是爲豐臣主所忌。信孝尋滅。元珍遂去靑地。東方寄食於會津蒲生氏。慶長四年己亥。去會津來仕賀州。子孫遂爲賀州人。元珍以寬永十年癸酉九月二十九日卒于金澤。取豐前守小倉實隆女。無子。以中務大輔佐々木高定(初名賢永老稱承渓)子等定爲嗣。以女配之。等定又稱四